

第1回箕面市新市立病院整備審議会概要

日時：令和3年2月11日（木）午後2時から午後3時40分

場所：箕面市立病院リハビリテーション棟4階 講義室1

【出席者委員】 坂田会長、土岐委員、木野委員、藤本委員、瀬瀬委員、中委員、土居委員、林委員、安倍委員、田中委員、高林委員

【事務局出席者】 上島市長、具田副市長、小林市政統括監、大橋病院事業管理者、田村総長、岡副院長、金子副院長、曾我副院長、梶原看護局長、三宅事務局長、木村副局長、山田担当副局長、森川室長、長島課長補佐、長田担当主査、木村

1. 開会

2. 市長挨拶

3. 委員自己紹介

4. 事務局紹介

5. 会長選出

委員互選により坂田委員が会長に選出

6. 諮問書手交

7. 議事

(1) 豊能医療圏の状況について

(事務局より資料1、資料2に基づき説明)

(坂田会長)

- 豊能医療圏では今後回復期の需要が伸び、回復期病床が大幅に足りなくなると予測されている。豊能医療圏各市町の高齢者の人口や人口比率がどのように推移していくのか、資料として提示することは可能か。

(事務局)

- 現在委託している「新病院あり方検討支援業務」の中で将来人口推計を調査しており、次回審議会で提示したい。

(2) 移転建替えに向けた経過と市立病院の経営状況について

(事務局より資料1に基づき説明)

(坂田会長)

- COM1号館跡地への移転建て替えについては決定事項とした上で、ゼロベースでの検討をすることになる。委員の皆さんの意見・質問をいただきたい。

(木野委員)

- 箕面市立病院の入院診療単価、外来診療単価、病床利用率を教えてください。

(事務局)

- 急性期の入院診療単価は約66,000円、回復期は約38,000円である。全体の病床稼働率は86.2%、回復期の病床稼働率は83.2%となっている。外来の診療単価は約14,000円である。

(木野委員)

- 急性期の入院診療単価として66,000円は少し低い印象である。平均在院日数は、何日か教えてください。

(事務局)

- 平均在院日数は11.3日である。

(木野委員)

- 民間病院も経営状況は厳しい。公立病院の職員も高い給与をもらっている訳でも、無駄遣いをしているわけでもないが、赤字が出ているのが現状である。経営改善の努力は必要であるが、病院経営には大きな投資が必要ということを全員が理解する必要がある。公立病院の役割・あり方は民間病院とは違うので、確実に黒字にすることだけを目指とするのかどうか。新型コロナウイルスなどに備えて、余裕を持った体制が求められるのではないか。
- 一方、急性期の入院診療単価が約66,000円であれば、救急受け入れ患者数を増やすことにより、病床稼働率を向上させるなど、経営改善の余地があると思う。

(藤本委員)

- 現在の回復期の診療単価を伺う限り、高い施設基準を取れていないのではと推察する。需要面から回復期機能が必要というデータも示されている中で、回復期機能を高めると医療の質も上がり、高い診療報酬も得ることができる。一方、そのためには人件費の投入も必要になり、その点はジレンマでもある。今後の病床配分の考え方も検討課

題の一つではないか。

(中委員)

- 市立病院の移転建て替えについては、既に議会で決定しているとのことだが、「ゼロベース」ではなく「マイナスベース」で検討できないか。医師会からすると、市立病院がそのまま移転建て替えしたとしても、あまり魅力を感じない。魅力があり、経営状況を改善できる病院にするためには、民間病院や他の公立病院との合併等により規模を大きくすることが必要ではないか。新型コロナウイルスを経験し、公立病院の体制強化が重要と考える。移転については既に決まっているということであれば仕方ないが、もう一度考え直せないかと思う。

(木野委員)

- 救急受け入れをどの程度断っているのか。

(事務局)

- 救急受け入れは、25%から30%断っている。

(木野委員)

- 経営改善には、診療単価を上げること、新規の入院患者を確保することが重要であり、そのためには救急を断らず、新規入院につなげることも大事である。

(安倍委員)

- 箕面市立病院は基幹病院であると感じている。市民の感覚からすると、箕面市立病院を頼りにしており、救急の時に受け入れてもらえないということはまず考えていない。そういう意味では、大切な医療機関であると感じているのではないか。実際に、救急で箕面市立病院に運ばれたことがあるかたからも、しっかりと対応してくれたという声を聞いている。

(田中委員)

- 病院の経営状況が相当な赤字であると初めて知った。市民にとっても心配であり、関心があることでもある。皆さんで知恵を出し合っていい病院になってほしい。
- 入院患者・入院収益が減少し、外来患者・外来収益が増加したとの説明だったが、理由を教えてください。

(事務局)

- 新規の入院患者数が、これまで年々増加してきたが、現在は頭打ちになっている。また、平均在院日数が短くなったため病床が空く状況になり、入院収益が減少している。外来については、がん治療の通院患者数が増加し、抗がん剤等の高額医薬品の使用が増えたため、それらによる収益が増加している。

(高林委員)

- 他の自治体は、公立病院を社会のインフラと認識して、一般会計から多額の繰入を行う場合もあるが、なぜ、箕面市は繰入を行わないのか。
- また、職員数の推移について、医師の増加について言及されていたが、割合からみると事務職員もかなり増加していると思うので、その理由をお聞きしたい。医師の働き方改革が求められる中で、医師数の増加や、それに伴う医師1人当たりの収益が減少するのは致し方ない面もあるのではないかと感じる。医師の働き方改革についてどのように考えているのか教えていただきたい。

(事務局)

- 現在も、小児救急や小児病床の確保に係る部分などは、定められた算定式に基づき一般会計から繰入を行っている。その他についても、基本的には「繰入すべきものは繰入する」という考えである。一方で、繰入の財源は税金であることから、繰入をする場合には病院としての役割を明らかにする必要があるが、その点が明確にならなかったため、結果として平成28年度から繰入を行っていないという経緯がある。今後も全く繰入を行わないというものではなく、公立病院が担うべき政策医療や不採算医療については繰入を行い、一般医療の領域については健全な経営を目指していくという認識である。
- 事務職員の増加については、これまで入院の医事業務を外部委託していたが、DPCによる診療報酬算定制度に移行する際に、精通した知識と現場との連携が必要になることから、直営に戻し、新たに事務職員を採用したことが理由である。また、退院支援等、地域医療支援業務の充実を図るため、事務職員を増員してきた。
- 医師の働き方改革については、勤務環境を考慮して、1診療科に対して2人以上の医師を確保してきた経緯がある。

(土岐委員)

- 今回は、箕面市立病院のデータのみが示されているが、他の公立病院のデータと比較してほしい。経営改善は、箕面市立病院だけでなく、公立病院共通の課題であると認識をもつことが大事ではないか。

(坂田会長)

- 各委員のご意見に共通しているのは、「市民から頼りにされている」という市立病院のあり方を、どう考えていくのかということではないか。働き方改革や新型コロナウイルスなど社会情勢の変化を踏まえた上で、市立病院を維持していくために必要な内容をしっかりと議論していくべきである。また、中委員からご意見があったように、移転する意義についても、「あり方」の議論にも繋がるものであると考える。
- 本日、各委員から依頼されたデータは次回審議会で提示していただきたい。

(3) 検討の方向性と今後の進め方

(事務局より資料1に基づき説明)

(坂田会長)

- 箕面市立病院が船場のCOM1号館跡地に移転建て替えをする意義、最適な運営手法の選択、そして、魅力ある病院にするにはどうすべきか議論していく必要があるということが示された。委員からご意見・ご質問はないか。

(瀨織委員)

- 職業柄、様々な病院を見ているが、だいたい公立病院では、病床稼働率が85%程度であれば黒字になるが、それは一般会計からの繰入があつてのことであり、それがなければ実質赤字。民間病院では、病床稼働率が約90%はないと黒字にはならない傾向である。
- 箕面市立病院の人件費を見ていると医療技術職の人数が増えているが、それが収益に繋がっていないように見受けられる。
- 比較的近い場所に移転建て替えをするので、患者動向は大きく変わらないと予測されるが、現在どういう疾病の患者がどこから来ているのかといった患者受療状況を示してほしい。病院間の連携を議論する材料にもなるだろう。また、大事な指標として、手術件数等のデータも示してほしい。
- 大阪府下は民間病院も公立病院も多い。1つの自治体がそれぞれ1つの公立病院を維持する姿は、今後時代の流れに応じて変化していくと考えている。今後は、大阪大学医学部附属病院を含めた豊能医療圏で機能分担を検討する必要があるのではないかと。大阪府南部や川西市では、民間病院を交えて実際にそうしたことに取り組んでいる。

(坂田会長)

- 経常状況の詳細や患者受療状況等のデータを次回の審議会で提示していただきたい。
- また、1つの自治体が1つの公立病院を維持する姿が適切かの議論は、審議会のみで判断できるものではないが、地域の中でどのような議論が進められているかについて、適宜情報を提示いただくことも必要であると考えている。

(上島市長)

- 市議会議員、府議会議員を経験する中で、近隣の自治体がそれぞれ公立病院を持つ必要性については、議会で議論したこともある。公立病院や民間病院との再編統合も視野に、議論を踏み出していく必要があると考えている。公立病院には、政策医療を担うという使命があるが、その実現のためには健全な経営が必要である。箕面市立病院が担うべき役割を絞った上で、民間病院や大阪大学医学部附属病院、国立循環器病研究センター等の医療機関との連携も重要だと認識している。

(土居委員)

- 箕面市立病院の医師も収益を増加させるために様々な努力をしていると思う。ハード面だけではなく、ソフト面、職員のモチベーションを高めるための議論もしていただきたい。職員のモチベーションを高めることにより、医療の質も上がり、地域からの信頼も高くなり、結果、地域の医療機関からの紹介も増加するなど Win-Win の関係になるのではないかな。

(林委員)

- どの公立病院も経営は、厳しい状況である。箕面市立病院の今後の経営を考えていく中で、赤字は当たり前という意識を捨てる必要があると考える。また、COM1号館跡地への移転建て替えにより、立地条件を生かした取り組みや、他病院との再編統合による補助金獲得等の「ウルトラC」を探すことで道が見えないか。医師会や歯科医師会、薬剤師会も協力していきたい。

(木野委員)

- 箕面市立病院の経営は危機的状況であるが、民間病院も決して例外ではない。30%を超える民間病院は赤字である。経営を黒字化するためにやるべきことは、診療単価の高い患者を集め、低い経費で運営するというところに集約される。
- 今回の新型コロナウイルス対応で感じたのは、役割分担が必要であるということ。「新型コロナ患者に対応する病院」、「新型コロナウイルスの疑い患者に対応する病院」、「それ以外の一般医療に対応する病院」という役割分担。その中で一番負担が大きいのは、新型コロナ患者に対応する病院である。新型コロナウイルス患者を受け入れるためには、通常の数倍の人手が必要であり、病床は半分使えなくなる。そうすると、たちまち赤字になってしまう。公立病院が率先して新型コロナウイルス患者を受け入れているのはありがたい。もちろん患者が多くなってくると民間病院でも受け入れることにはなるが、公立病院の役割がしっかりあるんだということを再認識したところ。普段からいざというときのための体制をとっておくということだと思う。
- 現在の経営状況で運営できるのであれば、それに越したことはないが、赤字を続けるわけにはいかない。少しでも入院患者を増加させ、少しでも無駄を削減し、職員1人当たりの生産性を上げることが重要である。市民のかたも含めて、市立病院の果たすべき役割を真剣に議論した上で決める必要がある。医療の内容を考えずに経営だけを黒字化することは簡単だが、それが本当にいいのか、ということも考えなければならない。

(坂田会長)

- 新型コロナウイルス対応の中で見直されている部分も含めて、公立病院が果たすべき役割をしっかりと議論する必要があるとのご意見をいただいた。運営主体・運営手法は、果たすべき役割を議論していく中で、見えてくるのではないかな。
- また、そこで働く職員の側から見たとき、どういった病院か働きやすい・働きたいと

思える病院なのか考えることも重要とのご意見があった。遠隔診療やI o T等の技術を活用することもひとつの方策かもしれない。そういったソフト面をしっかりと考えて、若い職員が魅力を感じる病院を実現できればと思う。

- その他にも、現状の病床稼働率や入院・外来の診療単価、救急患者の受け入れ、繰入をどうしていくのかという議論もあった。「ウルトラC」という言葉もあったが、現在の経営状況をどう改善をしていくかも平行して考えていく必要がある。また、市も新病院の整備費用を負担するという事で、市民にどう説明責任を果たしていくかも重要である。様々な検討課題があるが、引き続き委員の皆さんに積極的な意見をいただきたい。

8. その他

事務局より次回審議会を令和3年4月3日（土）午後2時から開催する旨連絡。

以上